

- 1 正月に喰はるる牛の曳かれをり
- 2 初声の主の名を問ふ共寝かな
- 3 福袋中覗いてる親子かな
- 4 愚人とは我のこと也五日過ぐ
- 5 七草薺嚙して遠き昔かな
- 6 バスに乗るお澄まし顔や松の内
- 7 水仙をぼんやり見てる女四十
- 8 松飾りぼつりと残る精肉舗
- 9 橙をふと買うてみる雨上がり
- 10 買ひ物の道の半ばに薺かな
- 11 屁ひられてたじたじとなり春の情
- 12 女三人啜る団子汁春うごく
- 13 しらじらと春の登ものの影
- 14 つちふる日友は解雇を告げらるる
- 15 犬撫でて春の温みに酔うてをる
- 16 しら梅の花しづしづと崩れゆく
- 17 ただ風に吹かれて寝たき雛祭
- 18 春風を圧して立てる桜島
- 19 村はづれ一家総出の花見かな
- 20 新入生詰襟はまだふはふはと
- 21 白つつじ咲いては雨にうたれけり
- 22 かぎろひの彼方へ伸びる鉄路かな
- 23 へしやげたるペットボトルや春の雷
- 24 大男新緑の中風呂に入る
- 25 どこまでもすずしき風や藤の蔭
- 26 芍薬の匂ひの如き昔かな
- 27 古寺やによつぽり出づる松の花
- 28 銭湯へ入りてみたる薄暑かな
- 29 梅の実のひとつ転げて夕餉時
- 30 だんだんと小さくなりて草蚩
- 31 郭公の鳴く山下りて尿かな
- 32 二三匹金蠅ねぶる糞一つ
- 33 外人もちつとバス待ち梅雨曇り
- 34 も一つの朝のひろがる植田かな
- 35 夏草へ埋もれてゐたき心かな
- 36 ピンの先うすく錆びゐる五月闇
- 37 朝帰りおしろい花の咲きをれり
- 38 梶子の強きにほひや夜の街
- 39 いつしんにきいろく咲いてをるカンナ
- 40 茂り葉の奥に棲むのは病む女
- 41 自転車で追うて行きたや入道雲
- 42 夏の日昏れて空地はどこまでも
- 43 口あけて蝉時雨きく日曜日
- 44 観音にパンを供へて夏休み
- 45 亡き人を偲びて夏の薨かな
- 46 この雲は印度の雲か胡麻の花
- 47 労働の後にふはりと夕立風
- 48 遙かなる昔へ還る昼寢覚
- 49 幾千の蝉生まれ来て熊本城
- 50 猫の仔は知らぬ体なり廓跡

- 51 ダチユラ咲く朝の淋しき郷社かな
 52 見も知らぬ女の小鼻秋暑し
 53 時刻表繰りて西日の中にある
 54 虹掛かる二百十日の造成地
 55 鶏頭をすこし売りたる小店かな
 56 海原のひかり滴る夏蜜柑
 57 まつくらやみ麦の波ゆれてゐる
 58 戸の隅に身じろぎもせぬ轡虫
 59 夏菊に男の背中触れて行く
 60 うつせみの三つ並びて宙睨む
 61 立秋を知りてわづかに惑ひけり
 62 赤信号佇む横に秋の声
 63 だらしなく酔うて仕舞うて野分かな
 64 松ぼくり抛てる時闇ひらく
 65 あぶれ蚊の羽音かすかに終電車
 66 梨袋提げて楽しき家路かな
 67 ぎらぎらと照らされてゐる月見かな
 68 菊人形花はいまだに開かざる
 69 地藏盆子らの瞳のきらきらと
 70 身の内へひやりと迫る枯葉かな
 71 手伸ばして風船かづら割つてみる
 72 秋うらら沖をみてゐる鷗かな
 73 おおぞらが彼方此方に野朝顔
 74 いちぢくの匂ひ辿りて田舎道
 75 さむざむと灯火つづく倉庫街
- 76 風冴へて雲仙嶽の近さかな
 77 短日に自足してゐて飯一膳
 78 木下の闇にゆらりと花八つ手
 79 マフラアを翻し行く知らぬ街
 80 冬の日をみつめてしばし一人ゐる
 81 誰一人来ぬ城に射す冬日かな
 82 傷つきし梟一羽檻にゐる
 83 行き場なき鹿の話や夕焚火
 84 ストオヴの消えて終ふて雨の音
 85 凧やむかふの岸の作業船
 86 干大根ここは長門の知らぬ町
 87 くだを捲く人ふりすてて外は雪
 88 父母に背きて君とゐる冬日
 89 あはあはと山東菜三把プラの籠
 90 ほくほくと幾千万の落葉搔く
 91 白粉の香のうつすらと寒詣
 92 手を擦りて寒さ楽しむ朝かな
 93 私利私欲忘れ忘れて冬木立
 94 水をのむこの水中に冬ひそむ
 95 踏切のたらたら鳴りて冬日向
 96 冬休み単車のとまる武家屋敷
 97 家移りの身にはらはらと冬の雨
 98 ロッカーの名札外して掃納
 99 病院の窓あかあかと年の暮
 100 歳晩や挽ぎ残したる柿三つ